



梅島小だより

「考える力」を育てる

校長 江原 敦史

学校では様々な能力を育てています。「考える力」もその一つです。

日頃、子どもたちの学習の様子を見ていて時々気になることは、「あっているか、間違っているかを気にする」ことです。「正解」を気にすることも多いように感じます。

学習を「（テストなどの）問題に対して正しく答えること」だと子どもたちが捉えているとしたら、私たちは授業を通して「（自由に）考えることも楽しい！」ということをもっと伝えなければなりません。

「考えるとはどういうことか」の著者である梶谷真司氏は、その著書の中で「考えること」について以下のように述べています。

「『考えること』は、他の人との対話、『共に問い、考え、語り、聞くこと』であると言える。」

「私たちは、『問う』ことではじめて『考える』ことを開始する。思考は疑問によって動き出すのだ。だが、ただ頭の中でグルグル考えていても、ぼんやりした想念が浮かんでは消えるだけである。だから『語る』ことが必要になる。きちんと言葉にして語ることで、考えていることが明確になる。」

次期学習指導要領の重点項目の一つに「主体的、対話的で深い学び」があります。上の「考えること」は、まさにこの「主体的、対話的で深い学び」につながっていると考えます。

子どもたちは日常の中で「あれ？」「なんでかな？」という気付きや疑問を感じるが多々あります。しかし、それが意識化・言語化される機会は多くありません。

子どもたちの気付きや疑問を言語化する場面を設け、「考える力」を伸ばすことができるのが授業です。

2015年に、梶田隆章氏（東京大学宇宙線研究所所長）が日本人として24人目のノーベル賞を受賞しました（ノーベル物理学賞）。

受賞理由は、素粒子に質量があることを証明する「ニュートリノ振動」の発見です。

「ニュートリノ振動」発見のきっかけは偶然でした。

この時のことを梶田隆章氏は次のように述べています。

「私は基本的には観測や実験をしているので、『ひらめき』というより『気付き』が重要だと思う。陽子（ようし）の崩壊を探していて、偶然、ニュートリノがどうも少ないと気が付いた。しかも、それを放っておかなかった。そこが重要だった。」

「気付きを放っておかなかった」ことが大発見につながったのです。

「正解」を気にする学習では、「気付きをそのまま放っておかない力」は育ちません。

様々なことに対応することが求められる中、十分な時間を確保することが困難なこともあります。子どもたちの「考える力」を伸ばすことができるように、そして、教師と子どもがともに「考えること」を楽しむことができるように、日々の教育活動に取り組んでまいりたいと思います。